

## 人間関係力の育成に向けた保育者養成教育

－保育者の困難事例から学生は何を学ぶのか－

加藤 由美<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立短期大学幼児教育学科

(2018年11月21日受理)

保育者(幼稚園教諭及び保育士)を目指す学生が、保育現場の実情を知り、職務上の人間関係のあり方や保育者としての心構えについて考えることができるようにするため、保育者養成短期大学1・2年生に対して現場の保育者の困難事例を提示した。学生111名が記述した学んだことや心掛けたいことに関する内容の質的検討を行った結果、学生は保護者への伝え方の難しさや大切さに気付き、言葉遣いや伝え方への心掛け等について考えるとともに、職員間の考え方の違いや人間関係の難しさを知り、保育者としてのあり方や心構えについて考える機会になったことが窺えた。本稿では、保育者の困難事例と学生の記述内容との関連や人間関係力の育成に向けた保育者養成教育のあり方についても考察した。

(キーワード) 人間関係力、保育者養成教育、大学生、困難事例、質的検討

### 1. はじめに

職場の人間関係の問題は、幼稚園教諭及び保育士(以下、「保育者」と略記)にとって大きなストレスの原因となっている。特に、若手保育者は多くの困難を抱え易いため、他の年代の保育者よりも心の疲労度が高く、バーンアウトに陥る危険性が高いことが指摘されており、早期離職の問題が懸念される<sup>1)</sup>。

保育者の早期離職の理由に関する先行研究を整理すると、保育の力量や専門性の問題よりも、職場の人間関係や管理職との関係、また職場の文化への適応におけるつまずきが多く見られることから、養成教育では、保育技術や子どもと対応する力といった専門性の向上よりも前に、いわゆる社会人基礎力にあたる力の養成を重視する必要があるとの指摘がある<sup>2)</sup>。経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力」は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力であり、その中の1つである「チームで働く力」は、職員間の連携が欠かせない保育現場において特に求められる。保育現場では、複数担任制をとったり、新卒者とベテラン保育者が一緒に仕事をしたりする場合が多く、職員間で望ましい人間関係を築いていく力が必要となる。そのため、保育者を養成する大学・短大においては、人間関係力を育むことを主眼に置いた教育実践が求められている。

真下・張・中村(2010)は、保育者養成課程の学生のコミュニケーション能力に関する苦手意識を明らかにし、学生自身の対人関係を自ら構築する力を育成することが第

一の課題であるとしている<sup>3)</sup>。善本・善本(2008)は、保育者養成短大生の特徴として、困難な状況への対処、積極性・自己主張性、問題発見、目標設定等に対するスキルの弱さがあり、困難な人間関係から逃げずに改善しようとする意欲と具体的な対処方法を身につけることが必要であると指摘している<sup>4)</sup>。

職場内の人間関係といったコミュニケーションの問題等に対しては、実際の保育者の職場の在りようを理解することが求められている(西坂, 2014)<sup>5)</sup>。そのため、保育者養成教育において、学生が現場の実情を知り、職務上の人間関係のあり方について考えたり、保育者としての心構えをもったりすることは大切であると考えられる。

そこで、保育者養成校(以下、「養成校」と略記)の学生に対して、特に現場の保育者が困難を抱え易い職務上の人間関係における具体的な事例を提示し、その中で学生の学びについて明らかにするとともに、人間関係力の育成に向けた保育者養成教育のあり方について検討することを目的とした。なお、本稿では、保育経験年数5年未満の保育者を若手保育者、5年以上を中堅・熟練保育者とした。

### 2. 方法

平成28年6月、A保育者養成短期大学の1年生56名、2年生55名を対象として、筆者が担当する各学年の授業において、保育者の保護者への対応の困難事例、保育者の職員間の連携の困難事例を提示し、それぞれについて学んだことと保育者になった時に心掛けたいことについて自由に記

\*連絡先: 加藤由美 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

述させた。困難事例の内容は、保護者に子どもの怪我や友達とのトラブルを誤解のないように伝えることの難しさや、職員間の人間関係の難しさ等であり、保育者を対象としたアンケート調査<sup>(6)(7)</sup>により得られたものである。全335事例<sup>(8)</sup>の中から、特に、学生が保育者になった際に遭遇しやすいと思われる事例や、中堅・熟練保育者から見た若手保育者の課題に関する事例等、養成校の教員として学生達に考えさせたい「保護者対応の困難事例(7事例)」と「職員間連携の困難事例(17事例)」(表1、表2-1・2-2内の「学生への提示事例」)計24事例を選定した。

#### 【分析の方法】

まず、「保護者対応の困難事例」と「職員間連携の困難事例」に関する学生の記述が、24事例中のどの事例に関する内容なのかを判別可能なものを取り上げ、学年別に分類し、一覧表に示した。その際、いずれの事例にもあてはまる記述内容に関しては対象から外した。

次に、「保護者対応の困難事例から学生が学んだこと」、「保護者対応の困難事例から学生が心掛けたと思ったこと」、「職員間連携の困難事例から学生が学んだこと」、「職員間連携の困難事例から学生が心掛けたと思ったこと」に関する自由記述の内容について、KJ法(川喜田、1967・1970)<sup>(9)(10)</sup>を用いて記述内容別にカテゴリーを生成し、質的分析を行った。その際、独断的な判断になるのを避けるため、また、内容分析やカテゴリー生成の妥当性を高めるため、筆者と保育者養成短期大学の学生2名とで以下のように検討を行った。まず、筆者および学生2名が、各自で記述内容について検討した上でカテゴリーを生成した。その後、各々の結果を照らし合わせ、一致しない場合には各自の判断の根拠について確認し合い、再度検討を行った。その作業を経てカテゴリー表を作成した。

「職員間連携の困難事例から学生が心掛けたと思ったこと」については、全ての記述内容とその数について学年別に分類し、一覧表に示した。

#### 【倫理的配慮】

学生(研究対象者)には、口頭にて研究の趣旨、目的、方法を伝えると共に、研究協力は自由意志によるものとし、協力しない場合でも不利益を受けることはないこと、成績評価には一切影響しないこと、授業の成果を研究として公表することについて説明を行い、回答を記述した用紙の提出をもって同意を得たものとした。記述内容の取り扱いに関しては、個人が特定されないように十分配慮した。

### 3. 結果

1・2年生111名から自由記述の回答が得られた<sup>(11)</sup>。まず、「保護者対応の困難事例」と「職員間連携の困難事例」に関する1・2年生の記述数を表1、表2-1・2-2に、学年別の総記述数を表3に示した。

表1、表2-1・2-2によると、学生の記述数(以下、( )内に示す)は、「保護者対応の困難事例から学生が学んだこと」(267)、「(同)心掛けたと思ったこと」(134)、「職員間連携の困難事例から学生が学んだこと」(313)、「(同)心掛けたと思ったこと」(354)であった。全体的に1年生の記述数が多い傾向が見られ、特に「職員間連携の困難事例から学生が学んだこと」の記述数が2年生に比べて多かった(表3)。全24事例の中で、学んだこと、心掛けたことに関する記述数が最も多かったのは、1・2年生共に保護者対応の困難事例5「子ども同士のトラブルの保護者への伝え方の困難」(180)であった(表1)。次いで多かったのは、「保護者対応の困難事例」では、事例1「発達障がいの子をもつ保護者への対応」(82)であり(表1)、「職員間連携の困難事例」では、事例9「コミュニケーションの困難」(65)、事例11「若手保育者の受け身の姿勢」(61)、事例15「若手保育者のメンタルの弱さ」(61)、事例21「職員間の保育観の相違による困難」(61)であった(いずれも表2-1・2-2)。

「保護者対応の困難事例から学生が学んだこと」(表4)では、保護者への伝え方の難しさ、保護者への伝え方において大切なことに関する記述等、「(同)心掛けたと思ったこと」(表5)では、保護者への伝え方、保護者の受容・信頼関係構築に関する記述等、「職員間連携の困難事例から学生が学んだこと」(表6)では、職員間の連携・信頼関係の構築、職員の世代による違いに関する記述等、「(同)心掛けたと思ったこと」(表7)では、自己のあり方・態度、職員間の連携・信頼関係の構築に関する記述が見られた。

「職員間連携の困難事例から学生が心掛けたと思ったこと」については、その記述内容が多様で、学年による差異も見られたため、全ての記述内容とその数について学年別に分類し、表8に示した。その結果、1・2年生の記述数の合計が最も多かったのは、「指導を受けたことは素直に、謙虚に受け止める」(表8:No.1)であった。学年別に見ると、1年生では「次に何ができるのか自分なりに考えて行動する」(同:No.5)、2年生では「挨拶、返事、態度など当たり前前のことを当たり前にする」(同:No.2)が多かった。

### 4. 考察

保育者の困難事例と学生の記述との関連から

保育者の保護者対応や職員間連携の困難事例と学生の記述との関連から、学生はどのような事例が印象に残ったのか、保育者としてのあり方や自身の心掛けについての学びが得られたのはどのような事例なのかを明らかにした(表1、表2-1・2-2)。

全体的に2年生に比べて1年生の記述数が多い傾向が見られた(表3)。「保護者対応の困難事例」における「子ども同士のトラブルの保護者への伝え方の困難」の3事例(表

表1 学生に提示された「保護者対応の困難事例（7事例）」と学生の記述内容との関連（N = 111）

事例番号	事例の記述者数		保護者対応の困難事例		「学んだこと」記述数		計	「心掛けたこと」記述数		計	合計	
	職種	若手保育者	中堅・熟練保育者	概要	1年生	2年生		1年生	2年生			
1	保	3	8	発達障がいの子どものことをもつ保護者への対応	発達障害が疑われる子や気になる子どもについて、その認識がない保護者に様子を伝える時、良い点を先に述べて気になることを言うと、良いところがあるから大丈夫というような伝え方をされる。遠回しに言うと、うまく伝わらなかったり、違った解釈をされることがある。検診などをすすめてもことわるなど、なかなか一歩が進まない。対応に難しさを感じる。（保育経験年数3年未満・20年未満・20年以上）	31	33	64	11	7	18	82
2	幼		1	子どもをもつ保護者への対応	ADHDを伴う自閉症スペクトラムという診断を受けている子（年長児）の保護者から、友達と上手く関わりを持っているのか尋ねられた。その頃、その子は自分の意見が通らないと手が出る状態が続いていたが、ありのままを伝えると保護者が心配するだろうと思ひ、よく出来たことを伝えていた。（園の方針により）時間が経つにつれ、次第によくなっていったが、小学校入学後すぐに人間関係で上手くいかず転校することになった。現状プラス、園でどう対処しているのか、両方を考えながらも、保護者の心配を取り除くような対応をすることのむずかしさを感じた。（保育経験年数15年未満、主任）	7	17	24	2	4	6	30
3	幼		1	子どもをもつ保護者への対応	特別支援を必要とする子どものことを、まだ何も感じていない保護者に伝えるとき、以前は、保育中に起きた困ったことを普段の様子をみて折り返して伝えるようにしていたが、こちらの意図が全く伝わらなかったり、逆に「うちの子は迷惑がられている」ととらえられたりしていた。最近では、保健センター等と相談して、話を進めるようにしている。（保育経験年数15年未満、副園長）		9	9	1		1	10
4	保	5	3	子ども同士伝えのトラブルの保護者への対応	保護者への対応で、怪我や友達とのトラブル（噛まれた、ひっかき）など、どのように伝えたらよいか、誤解のないように話すこと。（保育経験年数3年未満・10年未満・20年未満）	13	3	16	10	4	14	30
5	幼	1		子ども同士伝えのトラブルの保護者への対応	子どもAがBをつまんだ。帰ってBの保護者より電話がきた。気づいていなかったため、謝罪。翌日、A/Bに話を聞く。Aはやっていないと言う。Bは何も話さない。2人は仲も良かったため、再度一緒に話を聞く。Bの前で、Aに「もうしないで」と話すが、Aは「やっていない」と言う。その場合は、そこで終わり、保護者へ電話して状況を説明した。その後、Bの保護者より再度電話があり、「担任が子どものいうことを信じてくれなかった。この件以降、何かあってもBが担任にそれを伝えられない（信じてもらえないから）」と言われた。主任の先生や園長にも電話やお迎えの時に対応してもらい、今後信頼を取り戻せるように関係の回復をしていくと伝えた。（保育経験年数5年未満）	64	41	105	36	39	75	180
6	幼	1		子ども同士伝えのトラブルの保護者への対応	怪我（特にトラブルによるひっかき、噛みつき）が続いた際に、保護者へ伝えるべきか、また、してしまった方に伝える時、（子どもが名前を出して隠せなかったとき）の対応に困った。怪我をしてしまった方には、きちんと状況を伝えて謝罪し、させてしまった方には伝えていない。（保育経験年数3年未満）	16	11	27		1	1	28
7	幼	1		保護者への対応	クレームの多い保護者に悩まされています。（例）園行事の日程変更の要望があった。（理由）子どもは参加出来るが、自分（保護者）が参加できないため。始めは仕事の都合と言っていたが、どんどん聞いていってただその日程が嫌であったから。（対応）年間行事計画は、年度始めに全園児に配布しており、4月のPTA総会で園のやむおえない事情や災害など以外での日程変更は基本的に認めないと伝えていたのでお断りした。その方の希望通りに話が進まなかったため、行事がある度に、さらにクレームや指摘をするようになった。（保育経験年数3年未満）	8	14	22	13	6	19	41
計					139	128	267	73	61	134		

注1 「事例の記述者数」における「職種」の「幼」は幼稚園教諭、「保」は保育士を示す。

注2 学生の人数は、1年生56名、2年生55名、計111名である。記述内容は複数回答のため、記述数は学生数を上回っている。

1：事例4～6）は、いずれも若手保育者が困難を抱えやすい事例である。特にその中の事例5は、学んだこと、心掛けたことに関する記述数が、1・2年生共に全事例の中で最も多かったことから、学生にとっては学ぶ点が多く、将来保育者になった際に心掛けるべきことについて考えさせられた事例ではないかと推察された。

若手保育者に限らず、中堅・熟練保育者の多くが困難を抱え易いと考えられるのが、事例1（表1）である。この事例は「発達障がいの子どものことをもつ保護者への対応」の3事例の中でも、1・2年生共に学んだことに関する記述数が多い。

発達障がいと思われる子どもについて保護者にどのように伝えるのか、その伝え方の難しさは経験年数に関わらず多くの保育者が感じている問題であり、学生にとってはそのような現実場面での対応の難しさを実感できる事例であると考えられた。

「職員間連携の困難事例」（表2-1・2-2）においては、事例9「コミュニケーションの困難」の記述数が最も多く、事例11「若手保育者の受け身の姿勢」と同様に、「心掛けたこと」に関する記述数が1・2年生共に多かったことから、今後保育者として仕事をしていくにあたっての望ましい

表2-1 学生に提示された「職員間連携の困難事例（17事例）」と学生の記述内容との関連（N = 111）

事例番号	事例の記述者数		職員間連携の困難事例		「学んだこと」記述数		「心掛けたいこと」記述数		計	合計	
	職種	若手保育者 中堅・熟練保育者	概要	学生への提示事例（原文のまま。下線は筆者）	1年生	2年生	1年生	2年生			
8	保	2	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン の 困 難	自分が伝えなければならないことがうまくいえず、伝わらないことがあること。話すことが苦手なので、正しく先生方に伝わっていないかったりすると自分の未熟さから困難を感じる。（保育経験年数3年未満）	7	9	16	17	13	30	46
9	保	1	ケ ー シ ョ ン の 困 難	職員同士で話し合っている時、場の空気を読んで自分の意見、思っていることが言えない時。（保育士・保育経験年数3年未満）	7	7	14	22	29	51	65
10	幼	1		年々、新人の先生（20代前半）の姿が変わってきている。伝わっているかと思っていたことも上手く理解していないことがあり、挨拶や返事などから教えている。一つ一つ今すべきことを言うようにしている。もう少し「若さ」を発揮してほしいと願っている。（保育経験年数10年未満）	7	2	9	1	10	11	20
11	幼	1		若手保育者の受け身の姿勢	特に新人の先生に行事や保育、研修での心構え等詳しく伝えていなくても、上手く伝わっていないことが多い。また、特に年齢の層によって考え方が違い、「こういうことは当たり前」と思っている事でも一つ一つ丁寧に知らせていかないと、と思う。しかし、そうして教えていると、教えられて当たり前、教えられたこと以外には傾向になり、自分で保育を覚え、覚えたことを踏まえて考えて行動することが難しくなってしまうがちなところ。3か月たっても、当番の仕事について、「先生どうすればいいですか」と聞いてくるので、「きくことは大事。でも、もう3か月たってるんだから、しっかり覚えて自分でどうしたらいいか考えることも大事だよ」と言いました。まだまだ、人に聞いて頼ろうとしているが、少しずつ自分なりに考えて行動するようになってきたように思います。（保育経験年数20年未満）	13	4	17	28	16	44
12	幼	1	若手保育者の態度の問題	素直に年上、先輩の話を聞くことが出来ない。必ず「だって」が入る。そのままにして気づくの待つ。失敗させて気づかせろ。（保育経験年数30年以上、主任）	5	7	12	1	4	5	17
13	幼	1		若い先生に助言をしても嫌な顔をしたり鼻で笑ったりするので、助言としないようにした。その結果、父兄からの評判がさらに悪化し、苦情を私に言うてくるが…仕方ないと思う。（保育経験年数30年未満）	16	3	19	26	2	28	47
14	幼	2		若い保育士（20代前半）との考え方の違いにより意見が合わず、気に入らないと態度で示して気まずい雰囲気になる。アドバイスしようとして若い人に声をかけても「はい」という返事ではなく「ふーん」というような雰囲気返されることあり、言う気をなくしてしまいます（伝わらないのだな…）。（保育士、保育経験年数20年以上）	22	17	39	7	3	10	49
15	幼	1	若手保育者のメンタルの弱さ	新任の先生は、仕事の多さに耐えきれず、やめて行かれることが多いです。一緒に組んでいる先生が仕事の進行状況を確認したり、補助に入りますが、逆効果になってしまうことがほとんどです。歳の近い先生がフォローしようとしても、最近は精神的に弱かったり、自分に甘い先生も多く、無責任な締め方をしてしまいます。保育の質を保ちながらも、1年目を乗り切ってもらうためには、どのようにすれば良いのか職員でいつも考えています。（保育経験年数10年未満）	22	7	29	18	14	32	61
16	保	1	自 己 の 受 け 止 め 方	相手が軽はずみに言ったことでも自分は重く受け止めてしまい、悩んでしまう。（保育経験年数3年未満）	2		2	2		2	4
17	保	1		相手の裏を読んでしまうケースが多く、被害妄想で落ち込んでしまうことがほとんどである。周りに相談する人も少ないため、無理にでも気持ちをおさこめ切り替えていくように心がけている。そもそも周りを気にしがちな性格のため、人間関係については解決した試しもないし、慣れるまで気が許せるまでに、長い時間がかかる。外（職員室外）に出れば、悪口を言われている気がして、なかなか席を外すことができなかったり、相談しても相手に迷惑をかけるため、できる限り言わないようにしている。少しずつでもかかわるコツを身につけ、素直にコミュニケーションが取れるように努力していきたいです。（保育経験年数1年未満）	1	3	4	2	1	3	7

イメージや心構えをもつことに繋がったのではないかと考えられた。

「話せる相手がいない」という事例18、19については、特に1年生の「学んだこと」に関する記述数が多く、「若手保育者の態度の問題」「若手保育者のメンタルの弱さ」に関

する事例13～15についても、同様の傾向が見られた（表2-1・2-2）。1年生は、このような保育現場の実情を初めて知ったことにより、その中での学びも2年生に比べて多かったのではないかと推察された。

人間関係力の育成に向けた保育者養成教育

表2-2 学生に提示された「職員間連携の困難事例（17事例）」と学生の記述内容との関連（N = 111）

事例番号	事例の記述者数		職員間連携の困難事例		「学んだこと」記述数		計	「心掛けたいこと」記述数		計	合計	
	職種	若手保育者	中堅・熟練保育者	概要	1年生	2年生		1年生	2年生			
18	保	1		話せる相手がいない	仕事のことやプライベートのことで何でも話せる職員が少なく、他の職員に対して気を遣うことがあり、人間関係が難しいと感じる。(保育経験年数3年未満)	22	13	35	10	12	22	57
19	幼	1		話せる相手がいない	年齢の近い先生がいない。同期はいるがグループの他の園に配属。私の園の先生は30~40歳代の年輩の先生のためミーティングでも過去の話ばかり話題になり話についていけない。また、悩みや不満を言えるような雰囲気ではないため人間関係のストレスが溜まっていく。(保育経験年数1年未満)	22	10	32	9	7	16	48
20	保		1	職員間の保育親の相違による困難	複数担任になると、一人一人の考えが違って話がかまらぬ事もあり。しっかり話をすると共通理解できるが、自分の意見ばかり押し付けずに相手の話も受け入れていくのが難しい事もある。(保育経験年数10年未満)	24	3	27	5	15	20	47
21	保		1	職員間の保育親の相違による困難	職員間で保育に対する考え方の違いに一番の困難を感じています。例えば、給食の好き嫌いに対して、嫌いな物を無理に食べさせることはないという考えと、多少頑張らせたい、苦手をなくしたいという考えでぶつかった場合など、どちらがまちがっているわけではないので苦労したことがあります。(保育経験年数20年未満)	13	20	33	18	10	28	61
22	保	1		職員間の保育親の相違による困難	子どもの行動について、A保育士はいけない事だと叱る。B保育士はこれも成長のためだと叱らない。叱られることで子どもはいけない事だと覚えるが、注意するA保育士と注意しないB保育士との考え方の違い。(保育経験年数3年未満)	9	9	18	19	4	23	41
23	幼		1	困難	複数でクラスに入っているため、保護者同士の考え方や対応がそれぞれ違い意見がぶつかることもある。なるべくクラスのリーダーに従うようにしているが納得いかないまま保育することや保護者に対応することもある。人間なのであう合わないもあると思う。(保育経験年数20年未満)		1	1	5	8	13	14
24	幼		1	上司の対応	行事前に何か提案したり、クラスの製作をするといつも否定しかせず、すぐに却下されてしまう(上司)。上司に対して、朝・帰るときに笑顔で挨拶するが目も合わさず、笑顔で挨拶を返してくれない。自分のクラスの子どものことを「落ち着きがない」「積極性がない」「幼すぎる」等、堂々と私の前で言われるのがつらい。(保育経験年数10年未満)	5	1	6	8	8	16	22
計						197	116	313	196	158	354	

注1 「事例の記述者数」における「職種」の「幼」は幼稚園教諭、「保」は保育士を示す。  
 注2 学生の人数は、1年生56名、2年生55名、計111名である。記述内容は複数回答のため、記述数は学生数を上回っている。  
 注3 計は、表2-1、表2-2の各項目の合計である。

表3 困難事例から「学んだこと」「心掛けたいこと」に関する1・2年生の総記述数（N = 111）複数回答

	保護者対応の困難事例		計	職員間連携の困難事例		計	合計
	「学んだこと」記述数	「心掛けたいこと」記述数		「学んだこと」記述数	「心掛けたいこと」記述数		
1年生	139	73	212	197	196	393	605
2年生	128	61	189	116	158	274	463
計	267	134	401	313	354	667	

保育者の困難事例による学生の学び

保護者対応の困難事例からの学びについては、1年生が「発達障害が疑われる子の保護者への伝え方が難しそう、大変そう、分からない」「保護者からの信頼を得るための対応の難しさ、信頼関係を築くことの難しさ」といった感想を多く記述しているのに対して、2年生は「(保護者に対して)ストレートすぎず、遠回しすぎない伝え方が大事」

「子どもの姿や状況をきちんと把握しておくことは大切」「子ども一人一人に話を聞き、受け止めるべき」等のように、保育者の対応として大切だと考えられる具体的な内容についての記述が多く見られた(表4)。2年生は、実習やボランティア等の経験から、このような場面での対応方法についてある程度自身の経験を踏まえて考えることができたためではないかと推察された。

保護者対応の困難事例から心掛けたいこととしては、保護者に子ども同士のトラブルや気になる様子をどのように伝えるのか、例えば「言葉遣いに気を付ける。慎重に言葉を選ぶ」「正確な情報、事実を隠さずに伝える」「誤解のないようにきちんと状況を説明する」等、1・2年生共に保護者への伝え方に関して様々な気付きや配慮点を記述していた。また、日頃から保護者と子ども双方への理解を深め、関係性を大切にすることに関する記述も多かった(表5)。

職員間連携の事例からの学びについては、世代間の相違による連携の難しさについての記述が見られ、「職員間の

表4 「保護者対応の困難事例から学生が学んだこと」  
(N=111) 複数回答

カテゴリー	総記述数	記述内容(一部抜粋)	記述数	
			1年生	2年生
保護者への伝え方の難しさ	94	・発達障害が疑われる子の保護者への伝え方が難しく、大変そう、わからない	14	3
		・保護者にありのままを話すと、心配や反感があるかもしれない	5	12
		・誤解されないように状況を説明し、解決する難しさ	7	2
		・子どもへの怪我があった時の、怪我をさせた側、怪我をした側など保護者への対応が難しい	4	2
		・子どもの気になる部分(障がい)、トラブルを保護者に分かるように伝えるのは難しい。どのように伝えるべきか悩む	3	4
		・子どものトラブルは現場を見て状況を知っておかなければ、保護者への対応が難しい	1	4
保護者への伝え方において大切なこと	66	・ストレートすぎず、遠回しすぎない伝え方が大事	2	9
		・誤解がないように伝え方に注意する	3	2
		・怪我をするようなトラブルの時、怪我をした方とさせた方両方の保護者に伝えることが大切	3	7
		・子どもの保護者に良い面と悪い面の両方(ありのまま)について考えられるような伝え方が大切	2	6
		・子ども同士の喧嘩が原因で保護者の信頼を失ってしまう事例が多い。小さなトラブルも保護者に話すことが大切	1	4
		・保育者の伝え方次第で、保護者の心配や不安を少なくすることができる	2	1
保護者との関係の難しさ・大切さ	55	・障がいの受け止め方は保護者によって違うので、保護者と信頼関係を作ることが大事	5	6
		・保護者からの信頼を得るための対応の難しさ、信頼関係を築くことの難しさ	8	
		・長年保育の経験を持っている先生も、保護者への対応の困難を感じている	5	1
		・本当にクレームを言ってくる親がいることに驚いた	1	4
		・子ども同士の喧嘩が原因で保護者の信頼を失ってしまう事例が多い	3	
		・保護者との信頼関係をくずさない対処は難しい	3	
子どもへの対応	39	・子どもの姿や状況をきちんと把握しておくことは大切	1	6
		・トラブルの原因や状況を子どもの話から理解することの難しさ	5	1
		・子ども一人一人に話を聞き、受け止めるべき	1	5
		・子ども同士のトラブルは早めに対応する	2	4
		・子どもを信じることの大切さ	2	3
		・保護者も様々なので、一人ひとりを理解すべき。そうすれば少しでも対応が上手にいくと思う	1	2
保護者理解・支援	15	・保護者はわが子を第一に考える傾向が高い	3	
		・保護者は園での子どもの様子を見ていないので、子どものことを信じてしまうのだと思う		3
		・事例は保育士目線だから、保護者にモラルが無いように感じるが、そうさせてしまう原因が保育士にもあるんだらうと感じた	1	

注 記述内容は一部抜粋のため、各カテゴリー内の1・2年生の記述数の合計は、総記述数とは一致しない。

連携、コミュニケーションをとること、雰囲気、仲の良さは大切。良い連携がとれないとベストな保育はできない」といった意見があった。また、困難事例を読んで、「怖くなった」「不安になった」「心配」等のネガティブな思いを記述した学生もいたが(表6)、保育者になった際に心掛けたいこととして記述されたのは、自身が気を付けたいこと、頑張りたいこと等、ポジティブな内容がほとんどであった(表7・表8)。

職員間連携に関して学生が心掛けたいこと

職員間の人間関係の難しさから離職を考える若手保育者が少なくないことから、職員間連携の困難場面の事例を読んで、学生が将来保育者として働く上でどのようなことを心掛けたいと思ったのか、その詳細を明らかにすること

表5 「保護者対応の困難事例から学生が心掛けたいと思ったこと」(N=111) 複数回答

カテゴリー	総記述数	記述内容(一部抜粋)	記述数	
			1年生	2年生
保護者への伝え方	81	・伝え方や言葉遣いに気を付ける。慎重に言葉を選ぶ	8	12
		・正確な情報、事実を隠さず伝える	12	9
		・誤解のないようにきちんと状況を説明する	9	7
		・保護者の意見を聞きつつ伝えるべき事はしっかりと述べる	1	5
		・子どもの様子をこまめに保護者に伝える	4	2
		・保護者が納得するまで、問題が解決するまで、最後まで話し合う	3	2
保護者の受容・信頼	65	・保護者を傷つけない言い方で伝える	3	
		・発達障害について保護者と話す時、発達障害と関係ない部分でいい所を褒め、その後気になる疑いのある点を話す	1	
		・保護者の気持ちを受け止め、しっかりと子どもの話をする。日頃から保護者と信頼関係を結んでおく	9	22
		・子どもや保護者に信頼してもらうため、誠実に対応したい	2	1
		・保護者の立場に一度立てみる		3
		・日記や手帳などを通して親との関係を深める		3
関係構築・信頼	52	・自分の考えだけでなく、保護者の意見をまず大切ににする		1
		・一方的に提案するだけでなく、一緒に考え、サポートしていく姿勢を示す	1	
		・何かあれば他の先生に相談する。共通理解を図って対応する。職員間で情報共有する	15	15
		・専門機関と連携したり、意見を聞いたりする	6	8
		・保護者から家庭の様子を聞いて、連携しながら保育をする	3	2
		・子どもへの対応	48	
自己のあり方	41	・しっかり子どもの様子を見て、怪我をした場合にはしっかりと話を聞き現状把握を行い、保護者に状況を伝える	2	7
		・子どもの様子(実態)を常にきちんと把握しておく	5	6
		・子どもとしっかり向き合う、子どもを理解する	4	3
		・子どもの気持ちを否定せず受け止める	2	1
		・子どもと一対一の関係を大切ににする		3
		・子どもの最善の利益を考える		2
環境作り	12	・トラブルが起こった時、子どもと保護者それぞれの言っていることを大切にすること	3	4
		・どのような場面(クレーム等)でも、落ち着いて冷静に対応する	2	3
		・保護者の立場に一度立てみる	1	3
		・臨機応変の対応力を身につける	2	
		・一つ一つの関わりを丁寧にする	1	1
		・保護者同士がかかわれる場、仲良くなれる場をつくる		6
環境作り	12	・障がいのある子どもやその保護者が園で過ごしやすい環境をつくる		1
		・保護者との面談の機会をつくる	2	1
		・その場限りではなく、卒業後の子どもたちの姿も見据えて保育環境を整える	2	2

注 記述内容は一部抜粋のため、各カテゴリー内の1・2年生の記述数の合計は、総記述数とは一致しない。

は、人間関係力の育成に向けた保育者養成教育を考える上で大切であると考えた。職員間連携の困難事例から「心掛けたいこと」については、1・2年生共に幅広い様々な視点からの記述があり、自己のあり方や心構え等について前向きな意見や考えが多く見られた(表8)。記述数の多かった「指導を受けたことは素直に、謙虚に受け止める」「挨拶、返事、態度など当たり前のことを当たり前にする」については一見簡単そうでありながら着実に実行に移すのは容易ではなく、自分ではできているつもりであっても周囲の認識とは異なる場合がある。そのため、こうした基本的態度の重要性を学生が十分に認識したり再確認したりできたことは教育的意味がある。

また、心掛けたい自己のあり方として「次に何ができるか自分なりに考えて行動する」「自分が先輩という立場になったら、後輩の立場となって考えられる保育者になる」「自分がどのような保育をしたいのかということをしっかき自分の中につくっていく」等の記述が見られたことか

表6 「職員間連携の困難事例から学生が学んだこと」  
(N=111) 複数回答

カテゴリー	総記述数	記述内容(一部抜粋)	記述数	
			1年生	2年生
職員間の連携・信頼関係の構築	92	・保育者全員が様々な考えを持っているので意見が合わないこともある	17	2
		・職員間の連携、コミュニケーションをとること、雰囲気、仲の良さは大切。良い連携がとれないとベストな保育はできない	5	11
		・自分の考えをいうとき、遠慮してしまうと、うまく伝わらなかつたり、誤解を招くような事態にもなるので、はっきり伝えることが大切	5	1
		・普段からコミュニケーションをとるべき	2	4
		・仕事量の多さに加えて職員間の連携など考えることがとても多く負担があると感じた。仕事がいやになる	1	5
		・保育者の価値観、考え方が違うため、受け入れることも必要	1	4
		・考えの違いがあった場合の対処の仕方は考えていく必要がある	3	2
		・職員同士の信頼関係が成り立っていない。信頼関係ができてこそよい保育ができる	2	1
		・複数担任で、保育者同士で意見が違くと、クラスの雰囲気や子どもにも影響が出てしまう	2	
		職員の世代による違い	63	・保育者の年齢や考え方の違いによる連携の困難さ。若い人と上の人はお互いに不満があり、それぞれに難しさを感じている
・世代の違いにより意見や考え方が食い違う	9			4
・若い人は教えられたこと以外しない、人を頼りにする傾向がある。自分で考えることが大切	8			1
・若い人は先輩の話をもっと理解していない	3			
・先輩保育士も若手のために努力している	2			
・年齢層によって違う考え方をうまく活用すればいい				1
人間関係の難しさ	51	・時代に流れることによって保育観も変化している		1
		・周りに話せる人がおらず、悩みや不安を他の職員に言えない環境があることを知った	12	5
		・職員間の人間関係が難しい	9	3
		・上司に気をつかい、思ったことが言えない	3	1
		・保育者歴が長いベテランの先生でも、職員間のコミュニケーションで困難を感じている	3	
自分なりの思い	46	・先輩後輩の関係づくりはストレスを溜めやすい	1	1
		・仕事の多忙さから無責任に仕事を辞める人が多い	10	2
		・新人の先生の態度が悪い。先輩の話を受けない	6	3
		・全部の園が職員間で仲良くやっているわけではないので、怖くなった		2
		・不安になった。女の職場は怖い	2	
自己方	31	・新人の対応で悩んでいる先生が多く、自分も同じような新人にならないか心配になった		1
		・就職して相談できる先生と出会えるか心配		1
		・先輩から教えていただいたことを素直に受け止める、謙虚な態度で指導を受けることが大切	3	4
		・いろんな保育をみて学び続ける姿勢	1	2
作環境	15	・保育者は精神面も強くなければならない	2	
		・人は変えられないので自分を変えることしかできない		1
		・それぞれの園でしっかり方針を作る、統一する	2	5
		・意見を言いやすい雰囲気や環境づくりが大切	1	4

注 記述内容は一部抜粋のため、各カテゴリー内の1・2年生の記述数の合計は、総記述数とは一致しない。

ら、保育者としてのあるべき姿や自分のなりたい保育者像を具体的にイメージする機会になったと考えられた。また、「人の意見、自分と違う価値観を受け入れる」「伝えるべきことを曖昧にせず、職員同士の共通理解がもてるまで話し合う」「気の合わない人がいても、その人に悪い態度をとるのではなく、仲良くなりたと思って近づく」「ベテランと若い保育者お互いが助け合っていくことが大事」等の記述が見られたことから、職員間連携に関する保育者の現状についての認識をもち、将来の仕事への心構えにつながっていることが窺えた(表7)。

人間関係の困難な状況にどのように向き合えばよいのか、学生の記述に見られたのは、「ポジティブ思考」「ストレス解消法を見つける」「厳しい助言をいただいても自

表7 「職員間連携の困難事例から学生が心掛けたいと思ったこと」(N=111) 複数回答

カテゴリー	総記述数	記述内容(一部抜粋)	記述数	
			1年生	2年生
自己のあり方・態度	255	・指導を受けたことは素直に、謙虚に受け止める(改善に努め、次に活かす)	17	22
		・挨拶、返事、態度など当たり前のことを当たり前にする	10	21
		・積極性、ベテランに頼らず自分から行動し、学習する意欲をもつ。前向きに捉える(ポジティブ思考)	11	10
		・次に何が出来るか自分なりに考えて行動する	17	3
		・譲れない意見や、自分の思っていることはきちんと主張する。目上の人にも自分を出す。衝突しても会話を続ける	15	1
		・嫌な顔をしない、態度に出さない、反抗的にならない	9	2
		・分からないことは積極的に聞く、そのままにしない	6	3
		・自己表出をする、自分の意見を伝えられるよう努力する	2	4
		・子どもの最善の利益を考える	3	2
		・自分が先輩というになったら、後輩の立場となって考えられる保育者になる	2	1
職員間の連携・信頼関係の構築	124	・楽しみをつくる、楽しむこと		2
		・自分が不当な扱いをされたら、相談しやすい先生(信頼できる先生)に相談し、対応を考えればよい		2
		・自分のために怒ってくれているのだと常に思う	1	
		・自分がどのような保育をしたいのかということをしっかり自分の中につけていく	1	
		・人の意見、自分と違う価値観を受け入れる、否定しない、他の保育者の意見を聞く	13	11
		・ベテランの先生やほかの先生に自分から積極的に関わる、普段のコミュニケーションを大切にすること	11	9
		・報告、連絡、相談		12
		・伝えるべきことを曖昧にせず、職員同士の共通理解がもてるまで話し合う	7	4
		・いろんな先生と仲良くなる、仲の良さを保つ等		5
		・自分の意見を述べ、相手の意見をしっかりと聞いた上で、二人の意見を上手く反映させるような方法を考える	5	
自分なりの思い	46	・自分からいい雰囲気作りをする		3
		・気の合わない人がいても、その人に悪い態度をとるのではなく、仲良くなりたと思って近づく	2	
		・子どもの姿をしっかりと見て、客観的に考察し、保育者間で伝え合うこと、そして子どもに必要な援助を共通理解して一貫した保育を行うこと		2
		・自分が周囲との距離を近づけようとする努力も必要		2
		・保育に対する考えは一人一人違つて意識すること		2
		・ベテランと若い保育者お互いが助け合っていくことが大事		1

注 記述内容は一部抜粋のため、各カテゴリー内の1・2年生の記述数の合計は、総記述数とは一致しない。

分のためと思って受け入れる」「自分が周囲との距離を近づけようとする努力も必要」「一人で抱えこまない」「世の中にはいろんな人がいるのだと割り切る」「相手の悪いところばかりでなく、いいところを見つける」「つらい気持ちを紙に書く」等であり、困難場面への解決策や対処方法を自分なりに考え、見出していることが窺えた(表8)。何らかの困難に遭遇した際、柔軟な発想で様々な対処法や問題解決法について考えられることがメンタルヘルスの保持につながることを学生自身が認識できるようにすることが大切である。

最近の若手保育者はメンタル(精神面)が弱いという指摘がなされる場合がある。その事に関連して「自分のクラスの悪口を言われたら、いいところをたくさんいう。遊びの案をたくさん考えておき、無視されてもめげない」等、指摘を受けて落ち込むのではなく、それに負けないメンタルの強さを感じさせる記述も見られた(表8)。職場の中で「空気を読む」(表8)こと、つまり周りの様子に敏感になるこ

表8 「職員間連携の困難事例から学生が心掛けたいと思ったこと」1・2年生の全記述内容 (N=111) 複数回答

No	記述内容	記述数		
		1年生	2年生	計
1	指導を受けたことは素直に、謙虚に受け止める(改善に努め、次に活かす)	17	22	39
2	挨拶、返事、態度など当たり前のことを当たり前にする。言葉遣いに気をつけ、マナー、予備知識を身につける	10	21	31
3	人の意見、自分と違う価値観を受け入れる、否定しない、他の保育者の意見を聞く	13	11	24
4	積極性、ポジティブ思考(前向きに捉える)、ベテランに頼らず自分から行動し、学習する意欲	11	10	21
5	次に何が出来るか自分なりに考えて行動する	17	3	20
6	ベテランの先生やほかの先生に自分から積極的に関わる、普段のコミュニケーションを大切に	11	9	20
7	相談しやすい先生や友人に話を聞いてもらう、信頼できる人、アドバイスし合える人をつくる	3	14	17
8	譲れない意見や、自分の思っていることはきちんと主張する。目上の人にも自分を出す。衝突しても会話を行う	15	1	16
9	伝えるべきことを曖昧にせず、職員同士の共通理解がもてるまで話し合う。自分の意見を述べ、相手の意見もしっかり聞いた上で双方の意見を上手く反映させるような方法を考える	12	4	16
10	普段から職員間で気軽に話せる雰囲気(信頼関係)、より良い保育のためにきちんと言い合える関係(連携)、環境を作る努力をする	8	4	12
11	報告、連絡、相談		12	12
12	嫌な顔をしない、態度に出さない、反動的にならない	9	2	11
13	分からないことは積極的に聞く、そのままにしない	6	3	9
14	先輩後輩関係なく、相手の気持ちを理解する。自分がされて嫌なことは他人にしない。人にやさしくする	6	3	9
15	強いメンタル。自分のクラスの悪口を言われたら、いいところをたくさんいいう。遊びの案をたくさん考えておき、無視されてもめげない	6	3	9
16	人それぞれ(保育に対する)考え方があることを忘れず、自分が正しいと思わない。自分の意見だけで物事を判断しない。自分と他の職員の保育、両方を大切に	2	6	8
17	自己表出をする、自分の意見を伝えられるよう努力する	2	4	6
18	ストレスをためない、ストレス解消法を見つける	3	3	6
20	学ぶ姿勢を持ち続ける。今のうちに学べることをたくさん学ぶ	1	5	6
21	いじめと新人教育は違うので、厳しい助言も自分のためと思って受け入れる。上司を敬う。嫌な指摘にも気持ちよく返事をする	2	4	6
22	子どもの最善の利益を考える	3	2	5
23	苦手な保育士も、勤務中はその気持ちを捨てる。私情を挟まない(公私混同しない)。感情的に人にあたらない	3	2	5
24	笑顔	1	4	5
25	先輩のアドバイスにしっかり耳を傾け、納得いかなければ意見を出し話し合うなどしていく		5	5
26	いろんな先生と仲良くなる、仲の良さを持つ。ベテランと若い保育者が互いに助け合う。周囲との距離を近づけようとする努力が必要		5	5
27	指導を受けたことを次に生かす。1回教わったことは自ら行動する		5	5
28	時間をかけて話し合いをする、話し合いを重ねる	5		5
29	広い視野や余裕をもつ、様々な視点から物事を見る、周りをよく見る	2	2	4
30	頑張る(なにがなんでも)1年乗り越えようと思う気持ち、頑張れる理由を見つける。途中で仕事をやめない	2	2	4

No	記述内容	記述数		
		1年生	2年生	計
31	一人で抱え込まない、他の人に相談する	1	3	4
32	自分からいい雰囲気づくりをする		3	3
33	自分が先輩という立場になったら、後輩の立場となって考えられる保育者になる	2	1	3
34	一生懸命な姿勢を常に意識すると先輩からも助言をいただけるはず	1	2	3
35	あまり深く考え込まない。心の中で軽く受け流す、鈍感になることも必要	1	2	3
36	不満や悩みを子どもに悟られないようにする	3		3
37	世の中にはいろんな人がいるのだと割り切る。あまり深く考えず、「この人はこういう性格の人だから」等と考えることで人間関係は上手くいくはず。視点を変えて接する		3	3
38	教えてもらったことはメモする	2		2
39	気の合わない人がいても、その人に悪い態度をとるのではなく、仲良くなりたと思って近づ	2		2
40	困ったときは勇気をもって相談する	2		2
41	楽しみをつくる、楽しむこと		2	2
42	気持ちの切り替えをする		2	2
43	子どもの姿をしっかり見て、客観的に考察し、保育者間で伝え合い、子どもに必要な援助を共通理解して、一貫した保育を行う		2	2
44	いろいろな人の保育を知り、良いところは取り入れる		2	2
45	自分らしく保育をする		2	2
46	自分が不当な扱いをされたら、相談しやすい先生(信頼できる先生)に相談し、対応を考える		2	2
47	自分は未熟だという気持ち、初心を忘れない	1	1	2
48	相手の悪いところばかりでなく、いいところを見る	1		1
49	空気を読む	1		1
50	園の方針を理解し、それに従う	1		1
51	先輩の動きをモデルにする	1		1
52	つらい気持ちを紙に書く	1		1
53	自分がどのような保育をしたいのかということをしつかり自分の中につけておく	1		1
54	自分の仕事に誇りが持てるようにする	1		1
55	自分の思っていることを誤解なく伝えられる力を身につける	1		1
56	言い訳しない	1		1
57	本当にあわない園だと思ったら無理せず辞める		1	1
58	我慢する		1	1
59	臨機応変に考えていく		1	1
60	人間関係をうまくできるような対応が必要	1		1

とは必要ではあるが、過剰な気遣いや考え過ぎは、気持ちの疲弊につながってしまうため(表2-1:事例17)、いい意味で「鈍感になること」(表8)、周りを気にせず自分自身を保てることもメンタルの強さと言えるかもしれない。

職員間連携の困難事例からの学びとして、若手保育者が無責任に仕事を辞めることに対する記述も見られており、学生がそうした現状についての認識をもつことにつながったと考えられた(表6)。中には「途中で仕事をやめない」「我慢する」「本当にあわない園だと思ったら無理せず辞

める」のように、学生によって異なる記述が見られた(表8)。仕事を安易に辞めることは許されないという認識は当然であるが、その一方で、ひたすら我慢を重ねて精神的に追いつめられ、抑うつ状態になる若手保育者も存在するため<sup>2)</sup>、どのような対応をすべきなのか一概には言えない難しさがある。そういった点を十分に認識し、自身や園にとって最善の方法は何かを考え、思慮深く対応することが求められる。

人間関係力の育成に向けた養成校のあり方

事例10、11(表2-1:「学生への提示事例」下線部分)のように「(若手保育者に対して)伝えているつもりが上手く伝わっていない」ということは、中堅・熟練保育者と若手保育者双方の認識や受け止め方にズレがあることを示している。そのため、双方が相手の立場に立って物事を考えることができるように、例えば、加藤・安藤(2015)の実践報告<sup>13)</sup>に見られるような具体的な場面での相手の気持ちを考えるといった取り組みを行うことが相互理解につ



ながる可能性がある。

若手保育者の中には、事例15(表2-1)のように無責任に辞めてしまう者や職業人としての資質・適性に欠ける者がおり、園や養成校にとっては頭の痛い問題となっている。そのため、養成校の段階において、個々の学生の資質や能力、適性、可能性等を十分に見極めた上で、責任をもって現場に送り出していくと共に、園と養成校とが連携を図りながら若手保育者を長い目で見守り、育てていくことが大切である。養成校においては、学生自身が客観的に自分を見つめ、自己理解を深めることができるような機会を設けること、自分の思いや考えを適切に相手に伝える力、保護者対応や職場内の同僚、上司との関係において困難な場面に遭遇した場合でもうまく気持ちを切り替えたり適切に対処したりできるような人間関係力を育む教育のあり方が求められている。

## 6. おわりに

保育者の保護者対応の事例から、学生は保護者への伝え方の難しさや大切さに気付く、保育者として言葉遣いや伝え方等に心掛けることの大切さを感じたことが窺えた。また、保育者の職員間連携の事例からは、職員の世代による考え方の違いや人間関係の難しさを知り、学生が保育者としてのあり方や心構えについて考える機会になったことが窺えた。保育者を目指す学生が保育現場の実情を知り、将来、人間関係における困難場面に遭遇した時にどう乗り越えていくか、保育者としてどうあるべきかを自分なりに考えたり、心構えをもったりできる機会を設けていくことは大切である<sup>14)</sup>。そのため、人間関係力の育成に向けた保育者養成教育のあり方を今後も検討していく必要がある。

## 参考文献

- 1) 加藤由美・安藤美華代(2012) 新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望. 岡山大学大学院教育学研究科研究収録, 151, 23-32.
- 2) 濱名陽子(2015) 保育者の早期離職に関する考察—養成教育との接続の課題—. 教育総合研究叢書, 8, 91-105.
- 3) 真下知子・張貞京・中村博幸(2011) 保育者—保護者間のコミュニケーションの改善をめざした研究(2)—保護者からの相談に対する保育者の答え方の特色— 京都文教短期大学研究紀要 50, 136-146.
- 4) 善本真弓・善本孝(2008) 保育学生の社会的スキル—保育学生の特徴と保育者養成に求められる教育—. 横浜女子短期大学紀要, 23, 27-38.
- 5) 西坂小百合(2014) 新任保育者が直面する困難とこれからの保育者養成(保育の歩み その2 保育フォーラム これからの保育者養成の在り方). 保育学研究, 52(3), 461-

463,

- 6) 加藤由美・安藤美華代(2015) 保育士の人間関係における困難感. 日本保育学会第68回大会発表要旨集, 84.
- 7) 加藤由美・安藤美華代(2016) 幼稚園教諭の人間関係における困難感. 日本保育学会第69回大会発表要旨集, 586.
- 8) 加藤由美(2018) 保育者のためのメンタルヘルス—困難事例から考える若手保育者の心理教育的支援—. 福村出版.
- 9) 川喜田二郎(1967/2006) 発想法—創造性開発のために—. 中公新書.
- 10) 川喜田二郎(1970/2002) 続・発想法—KJ法の展開と応用—. 中公新書.
- 11) 加藤由美(2017) 保育者の困難事例から学生は何を学ぶのか—保護者や職員との人間関係に着目して—. 日本保育学会第70回大会発表要旨集, 605.
- 12) 加藤由美・安藤美華代(2013) 新任保育者の抱える困難—語りの質的検討—. 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学論集, 14, 27-38.
- 13) 加藤由美・安藤美華代(2015) 新任保育者の心理社会的ストレスを予防するための心理教育“サクセスフル・セルフ”のプロセス評価研究. 岡山大学大学院教育学研究科研究収録, 160, 19-28.
- 14) 加藤由美(2013) 保育経験者の語りを保育者養成教育に活かす試みについての検討. 保育の実践と研究, 17(4), 58-72.

## 【付記】

本稿は、日本保育学会第70回大会(川崎医療福祉大学)において発表した内容<sup>11)</sup>を加筆・修正したものであり、研究成果の一部は、科研費(26590170)の助成を受けている。

